

七部集標註
上





七部集盛行于世久矣其為書也彰妙於
言外徵巧於單辭使讀者不倦且悟入其
奧旨可謂盡矣然鑽厲有年間勾棘難解
未有能正之者或一家妄說或自己憶斷
區々紛々至于今吾國有西馬師耽情蕉
翁學旁涉獵百家西行東遊遂獲七部集
善本更訂魚魯益諸註遺漏提要鈎玄名
曰標註七部集稿成將上梓未半病厚臨



ハ書ク 控置 可也 遺留 出のこも 思ひしを 刻永
ぬ 何の事かを 云ふ ことあり 之は 古の 詞句 必ず 古
備と 云ふ べき 古人の 後句 解詁 なる ことあり
と云ふ ことあり 其の 詞 句 なる ことあり 神妙 なる
ことあり 人心 なる ことあり 古の 詞 句 なる ことあり
標注 なる ことあり 古の 詞 句 なる ことあり 古事
古歌 名所 地名 昔 有 なる ことあり 禁 なる ことあり
昔 なる ことあり 原本 昔 著 者の 徳 等 なる ことあり
と云ふ ことあり 必 然 なる ことあり 句 句 なる ことあり
句 句 なる ことあり 必 然 なる ことあり 句 句 なる ことあり

その こと 係 係 長 なる ことあり 其の ことあり 彼 なる ことあり
其の ことあり 自 然 なる ことあり 其の ことあり 何 なる ことあり
一 詩 題 の 部 原本 たる ことあり 其 出 書 なる ことあり 正
其 後 の 句 を 改 正 する ことあり 本 文 たる ことあり 古 人 なる ことあり
朗 詠 なる ことあり 此 詠 なる ことあり
一 其 の 古 歌 集 なる ことあり 其 の ことあり 其 の ことあり
一 引 書 文 長 き 事 なる ことあり 久 保 なる ことあり 何 なる ことあり

一初心の解——
なまは強つてかた
一里本又ハ枚合変其——
て正片造り来——

潜窓之き雄述

惺庵西馬述
潜窓之き雄編
不知庵寄三校

布由濃日

題号ノ説多シトイトモ巻頭ノ句々
皆冬季ナリコトヲ冬ノ日ト云カ諸
解畧之

逾八道ナリ

佐夫高鏡

狂句ノ二字後ニ取給玉ヘトモ、六狂
歌魚應多リ貞亨ノ初年マテ
字余リ作多シ

竹齋ハ山城ノ人尾ノ名古屋ニ居
住ス寛文年間ノ人ナリ

天和三年印本竹齋物語狂歌數
多アリサレトモニ撰トスヘキ歌ナシ

此句竹齋トイヘトモ和歌ニ此歌多
シ撰ノ我トモ云

と云ヘルハ飛走ノ原本濁点アリ
炭俵ニモ入ルモ鳥ノ白トモ
アリ

主水職原抄間書ニ掌泉水

冬結日

冬を長連のふるふらふの歌はハ
とまりの嵐ふもめを伝事
たる日の人ふはあそびの心
くらむうの狂歌の才士は國を治
るるを不圖おもひ出さず

昔集

狂句ありて一節多し竹齋は狂歌
たまりの嵐ふもめを伝事
たる日の人ふはあそびの心
くらむうの狂歌の才士は國を治
るるを不圖おもひ出さず

野水 荷分 重五 杜國

井水又氷室官名ニ人倫打越
ノ論ナリ云

朝鮮也トイハ種アリ万葉ニ
艶ヲニホヒト訓リ

發ルヤリハ業平古事江記業
平為生髮到陸奥云又無名抄ニ
モ出

たこハ塔キリ
深瀬洋洲又攝津甲村ニ有云
小万ノ墓印ノ柳ナリ
らんハ踏鼓

ゆりキ日本記明達又山家集ニ

ゆりゆりゆりゆり
赤巻を巻く子宿るあたり
髪もやする様志のふのり
ゆりゆりゆりゆり
きえぬ平が海の上の
新法の燈をく大を燈
あつゝハ雲よたへハ雲
田中なるあつゝ極る
雲よふひく人とちん
雲よふひく人とちん
雲よふひく人とちん

正平 野水 芭蕉 荷分 芭蕉 杜國 野水 杜國

あらし山さのり八下と云カ多考證
アレトコハ俗ニ照レキ コトハレ
中古カノ反博ノ詞多
ニの尾ハ一筋ニ龍ト云カ如シ
野のむハ西行櫻ノ謠ニハ
五ノ字櫻トナリ
鼻のむハ酒ナリ詩陳風齊
自鼻曰酒
熊坂物見ノ松ハ美濃國青野ノ
原ニアリ白雲水ハ同國郡上郡
宮瀬川ノ邊ニアリ對附ナリ

唐首ハ高首自高國米故ニ多
家園ニ多ク載ル白首ヲ光リ
烏賊ノ白ハ古事記万葉本ニ麻
肩曉見ナリ唐主ニ龜ト云西
我ニ羊トナリ其ノ轉カ

二の尾ふと漸のむのけりきく
膝ハむとふとこもり鼻ハくむ
糸物子巻遠氣おろるた
とたねの矢をさるる報
盗人の記念おねの吹をよそ
まをり 家祖のあをけ 水
笠をまきしや理ふもめくおけり
そ枯りけそひりり 唐首
まをりと膝ハくると人の骨の何
烏賊ハえいその國のむと
あをれその謎もまをりけり
野水
芭蕉
香玉
花守
芭蕉
杜園
前守
野水
杜園
香玉
野水

秋水一斗漏刻ヲ云ナリ
事終ニ日東ハ則日本國也
石川大山ヲ日東 李杜ト云
先哲兼談及ニ素堂カ詩ナ
五車瑞韻ニ汝陽王雅打曲明
皇自摘紅槿置建帽上
とゆふハ用ナリ
蘇ハ俗字和名抄ニ鯛又鱈

居湯ハ釜ナキ風呂桶ナリ
瀝ト讀又瀝トモ云
白氏文集三月照藤花影上
指

秋水一斗漏つくすおそ
日東の季はうねる月をえんて
中ハ木槿張をさむ野鳥打
牛の乳をぬくふきのうとけり
箕ハ鉢の魚をいれさ
あいつりり 鳴くくの星野むと
あふハ妹の眉かきふ申ふ
暖比と居湯ハ湯をぬくを瀝ト
庭下をそほり影つたふや
芭蕉
香玉
花守
芭蕉
杜園
前守
野水
杜園
香玉
野水

文選振衣千仞岡九太中
杜律二老大徒悲志補衣ヲ

ナリナリ又云非ナレシ

帆ナリ

麻呂上古男子通稱多シ
鞆鞍六樂器ナリ
貞徳ハ風雅ニ富ミ且長壽ナリ
桃園乃兼園桃園ヲ屋ホノ
別荘ナリ
淡香陸奥雨越ニテ淡下ニ
俳諧ノ冠辭カ又カ元ノ假名ノ
名ヘルカ

おもひも壯年

中々あるも故郷をゆく

楚水

ちつ言のちりも袴をそえ
衣よすぶえり舞の倉
野兼侍て身ぬる袴の袖を襟
袴ぬる袴と車ひさき
麻呂の月袖小鞆を鳴らす
柳をそよあふる貞徳の笛
る古ゆる淡香の因幡袴を
衣のさくらさ成呂をそよ小泣
床文に袴袴はやくとす。男

杜園
芭蕉
若手
重玉
正手
杜園
楚水
若手

飛 窟ハ借字カ

識ナリ

繩網のからハ鞠掛リナシ

魏ハ遠ニ附ナリ

先童ハくらハ幾許ナリ年ト
尋問意ナリ
春季ヲ用ヒスニテ春ナリ

孫さあけけの娘のあらし
口をい痛をちきりちきり
明日ハかきさふ首送り
小三若小若をひらう
月ハ進うれ牡丹ぬす人
誰あまのかりをやれ壁を
あつくとこの地をきる所
初むの世もあつたのわ
かづらひくらあまをかき
梅葉又解を忍ぶ園わりの
うらひす起よあつて

芭蕉
楚水
重玉
芭蕉
杜園
重玉
若手
杜園
楚水
若手
芭蕉

不破美濃より今関ナシ
古集ニ名所地名ニ多く對付

傘、備字四手傘ナリ

唐輪、醫ノ名ナリ

慧照禪師ノ母ノ面影ヲ臨濟
院ノ名ナリ

四部祿十牛圖ニちうけり出

條ノくく指ハ柳ノ蒂ニ似ル

野水

之條カシム不破ノ昇人

重五

是ノ其ノ美徳ヲ打々其ノ志

芭蕉

祢ササリノササト七十一

杜國

幸加め凡高堂母ニ重五ノ名

重五

ひらりの傘の下傘ノ名ナリ

野水

華池ノ邊ノ子母ニ夕ノ名

杜國

重五ノ子ツクノ名様ニ夕ノ名

野水

月ノ名ニ重五ノ名ニ似ル

重五

重五ノ名ニ似ル

芭蕉

秋暁ノ名ニ似ル

野水

のキトコニシテ...

秋輝、藤實ニ回ニ意ナリ
職原抄内侍司ニ尚儀ノ典侍
平家物語小原御幸ノ面影
三日の花ハ上巳ナリ鳥軍ハ關
雞一轉ト云
白髪トモ白紙トモ一ノ一本ニ
白雲ニ誤ル

字典ニ兩樂、曰歩一歩ハ反也

古本ニ齊ハ書指和名抄ニ露雨
字ニ小雨也
稻妻ハ比喩ナリ

齒、赤ハ重五ナリ

藤ノ葉作ルニ葉ハつちり

重五

袂より硯をひらき山うけふ

芭蕉

ひらりハ典侍ノ局ノ内侍

杜國

ニケノ名、鸚鵡尾名ノ名ニ似ル

重五

重五ノ名ニ似ル

重五

杖ニ似ル事

僅ニ十ナリ

はみうき目より露ニ重五

杜國

水母ニ似ル水ノ名ニ似ル

重五

齒、赤ハ重五初狩ノ名ニ似ル

野水

万治ノ高権尤名高シ

九地心入リ
南堂ニ安んずの格を本侍して
才高き格よりもさき底深
るをこかし禅ハ一体深ゆすノ面
影ナリ
禅之を事トモ又借テゆス事ト
モ云リ候トモくも後ニシカカテ
ぬス事ト

あまのこころのこゝろを
さよとけ入りて
山家集 教くハ世のまこと
あまのこころのまことまのま
なり

襟み高権より袖をせやく
あまのこころを握る香るを
茶子のひくつみあをこかし禅
之日月の東ハ啼く鐘の聲
焔燈かすうみ琴より一寸老
高き事をゆりてさゆを教ふる
新しきを佛ノ教をなつ
歌ふるを吟けしよ起しひ
おまひのひつみあをの帯引
あまのこころのまことまのま
のの望の口をさよとおぬりく

芭蕉
まよ
杜國
芭蕉
聖水
杜國
高学
聖水
高学
芭蕉

一巻中於苗二句有各別意ナリ

万葉集 徒波人 華火 燈屋之
酌四手 雖有 已 甚 許 増 常 目 類
必 苦 拾 遺 三 卷 波 人 云 ち ち ち ち
ハナリ
色 ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ
カニノ意ナリ
職人 尽 歌 合 体 對 附 上 三
鏡 磨 身 負 寒 三 六 分
原本 トキキ 附 上 三
棘 正 字 ナリ 古 本 棘 偏 字

一本 秋 誤 織 アミ を 穿 の 振 實
スナリ
徹り 古 哀 徹 書 損 加 茂 未 社 稻 荷
ノ 祭 十 九 月 上 午 日 胡 麻 子 供
岩倉山城 加茂岩倉對附ナリ

あまのこころのまことまのま
のの望の口をさよとおぬりく

重五

炭賣のあまのまことまのまの
人の粧ひを鏡磨 言ハ
を練る骨の葉み嘆こころ
朝又る雲の月かすりちるを
風吹由林の白瓶に酒をさす日
茶織る笠 裁 市 二 握 まこころ
か茂川也胡麻子代を徹すこころ
ひまのの聲をさすこころ

高学
杜國
聖水
芭蕉
高学
聖水
高学
芭蕉

古本抄誤

山谷四休居士詩序三平二滿
過則休三平二滿俗云於多福
なりぬらふやうに暮か
とぬらふ暖たり

本郷江戸地名

古本郷字書三二郷誤字三疑
借字カ又儼カ諸説未詳
世の如く流るるにそはつても
ゆらゆらに流るるを蓮生
秋八録三二神嘗二月来カ各
和名抄三出神録二口吞盡江海水

おもふ予布搦哥はわりを
うきまをさくら 辰都る 三平
控らゆてくねる 智の 難 籠 鳥
火おらぬ 火 燧 正 人 を 人
門 ち の お 子 子 子 子 子 子
血 刀 か く ま 月 の こ ち 子
書 下 り て 本 郷 の 鐘 七 川 き
冬 中 川 酒 豆 ち ち ち ち ち
む 上 江 様 の 懲 と す け ち ち
借 字 の い ち ち ち ち ち ち
白 蕙 濁 ぬ 水 水 羽 を 洗 ぬ

聖水 杜園 羽鳥 芭蕉 重宝 杜園 聖水 芭蕉 羽鳥 重宝

元併本存見テ打越飲食雜

ナカルシ諸餅太詳
白燕云六觀水通意ノ附意カ
宣旨ハ勅命 叙ハ婦人岐辨ナ
今十歳ニツ見七十三ニ云説可ナ
ルシ
朗詠集心期片月欲為嫌ノ喜旁
西陽雜俎三月桂萬百丈トリ桂ノ
花ハ月ノ異名ナリ

本草三蘭葉可作膏塗髮トア

以ヤコ正月ナリ

晉書三常有紫氣室叙之精微
北天
南京ヲ何ノ方ニテ南都ト見
カヘリ奈良ニテキム連ト云モ

宣かーち 鏡を鏡 ち
ハナトを三ら ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち
西 南 二 桂 の ち ち の 茶 吐 吐
茶 の 油 子 志 ぬ 木 ち ち ち
妙 の ち ち ち ち ち ち ち ち
釣 籠 二 栗 枝 ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち ち
教 子 向 ち ち ち ち ち ち ち
宮 日 日 日 日 日 日 日 日
ち ち ち ち ち ち ち ち ち

重宝 聖水 杜園 芭蕉 重宝 杜園 聖水 芭蕉 重宝

鶴和名抄似鶴而異樹者也
鶴字典頭無丹頂身似鶴又仰
鶴則時俗謂則陰鶴又字鏡古希
あつたててト歎ハト笑ヒアト悲ミ
ハト歎クアトト重リテあつた
ハ幸リヨリテ歎息ナリ喜息哀樂ニ
ワレリ

いづきてはるもあぬ人の像
涙よあらの清き芥の根
粥すも曉むよかまはり
猪をり下小鏡ふまを
わろくくくくくくくくくくく
祢と能ぬ夢をまをるむくも
杜園
望水
芭蕉
羽筆

田家歌
雲月や霧のいこまふん
冬の日の中をれちうきり
櫻山家の体を木の葉降
芭蕉
香雪

は、物ヲ敷ル状ノ詞ナリ
ナカラニ通フト云ハ非ナリ

飯初ナリ

東海道藤澤山清浄光寺不二見
人尊トモ又駿州藤枝の免岩寺ト
格ト云
格ト云ハ和字ナリト方葉和名抄ホ
ニ出
題林恩抄ニ長茶形ノ名ニ見
テそのむれい為らんしあよむ
茶社家隆

山橋五葉ニ穀柑子云ハ八雲御
抄免慮深秘抄ニ牡丹云フソ
方ニヤ
麻集八作名ノ三

ひさびさの牛の塩あられは
春もなき具是月夜うら
酌もる 穀茶切り 以下
秋のあけぬの屋をぬいかり
漸くを捨て 富士にゆる寺
茶とて桂のむのさるる
茶は茶ゆふをむる風のま
雑遊は烏帽子能 女五三
庭ふ木を能る 意の為か
夏涼き山橋はくらん
麻のりとつふ哥の集あむ
杜園
羽筆
望水
芭蕉
香雪
杜園
望水
芭蕉
羽筆
香雪

獨樂庵温公獨樂園轉

此間四季句去り猶考

落舞轉勢

半興

莊子三尾尾於泥中轉勢

水の御藥水ノ粉ノ類ノ藥ナリ

和名抄ニ大豆又白角豆ナリ京本
小角三ノ小坊ナリ夏ニ冬ニ附
マヌク暑カラシム一奇ト云ヒシ

豎栗 芥子借字

心を近く獨樂庵と世を控
赤月出よよ身とおろろ
物衣留よ落葉を打掃
籠輿ゆよ瓜の四角の
骨を見て嘔よ洞をうら
乞食の藁をさらふ志の免
泥のうらよ尾を成鯨を控ひぬ
活きよ進むみみみみ
珠よ照る年の大角豆を
管登よさらよ岩を固けく
芥子尾の山坊交りよ打掃

豎栗 杜園 羽釜 聖水 杜園 聖水 羽釜

元政深草瑞光寺開山至孝人
西行
本懐伏見東より鐘花ヲ打テ
スラ云

秀句の巻頭ノ狂句ヲ結フ
貞徳時代本式ノ俳諧ニ鳥帽子大
致ニテ出席セリト木枯ノ身ヲ卷
ヲ轉シ山茶花ト草トナリト
揚句ニ結テ五卷ニ連環ナリ

をうらよのそなる葉の尖
去りあけよ飯盛のそく月の尖
露おく孤風やかかりき
釣材よを根よのれたる尾
豆腐つらうて母の喪よ入
之政の子は杖も破ぬへ
伏見本懐の鐘をそらつ
色深き男猫ひらね控り子て
春のらぬの雪掃をよふ
水干を秀句の解わのやみ
山菜む白ふ雪のあらうら

芭蕉 聖水 杜園 羽釜 聖水 杜園 聖水 羽釜

表合 八句又六句中ニ神釋
 經無常迷懷懷旧名所地名其
 卷ニ應シテ入ル格ナリ
 茶筌髮語ノ木賊刈ノ面影ヲ旗僧
 下酒ヲ酌シモ文中ニナリ
 四句目總ヲクノリ

岐阜山濃州地名

天和甲子年十月改元貞享
 トナル翁年四十一

追加

ひつみんよと籠^ル西牛をう川霞
 松ぞよあやう 松原の松
 本城^ノ川下よあやうをち花^シて
 松^ノ葉^ノま^ノ宮^ノ指^ノやつ^ノお^ノ露
 銀^ノの^ノ松^ノか^ノま^ノし^ノ月^ノも^ノ海
 ひ^ノろ^ノう^ノ松^ノを^ノま^ノる^ノ波^ノ岸^ノ心
 貞享甲子歳

羽^ノ豆

其^ノ号

重^ノ五

杜^ノ園

芭^ノ蕉

望^ノ水

枕草紙^ニ春^ノ暖^ヤク^クま^らく^云云
 又和歌^ニ春^ノの^暖の^詠多^シ

重五^北藤^居を^門名^古屋^村木^町
 久^後三^宮ノ^歌邊^ニ開^テ居^ス
 白^氏文^集卷^五第^三間^新草^堂
 石^階桂^柱竹^籬ト^ナリ

春の日

暖^ニむ^とん^の戸^扣あ^ひて^熱田
 り^うこ^まゆ^せぬ^渡一^船ま^はり^く
 たり^ゆこ^吹并^和の^うも^あん^え
 や^らん^てい^とま^また^りま^まり^り
 坐^おも^ろ作^場を^ちう^まま^は
 去^しう^け物^のま^まま^まま^ま
 出^たり^ま

二月十六日

ま^めく^やん^さは^ぐの^仔勢^まり
 松^らる^中馬^たが^かく^ま
 春^分
 重^五

支^百良^日

霞晴テ山館一時顯々夕月
夜光景ヲカク奇ニセリ

青葉ノ苗ノ旧漢分
異本ニテハコトハフテト誤
文王ノ林ハ詩經大雅周原無
董茶如餅林之陝陝度之葉葉
標之登登コノ章ノ意ナリ

古本晨明ハ誤字有履カ

山雲む月一吋は鑑立	雨相
體をのら結成はあさる也	李丸
夕風よりくくくを臨む	昌圭
くまりの伸の岩雲く見え	執事
次寺子汗の雫を従ふ	重五
おのくたまた苗を戴く	若手
文王臨林はたふも土はく	李丸
るの帯は角のなき草	雨相
紅雲の一度の骨板をくせふ	若手
似城乳をかくれは	昌圭
吾排ふ鏡よ人の糸絡	雨相

和名抄ニ雜和

梓馬ナリ

サガ尼ナリ統世継ニシテ
セリシトナリ
針立鍼医ナリ
職名抄ニ針博士五位下典藥頭
ニ准シテ五位方
徒跣

日ぬくとのこ流	薬か	里	重五
多座より	雪色	奥の砂行	若手
むは	世界	疎	あらる
柳	よき	陰	あらう
入	うら	り	日
う	つ	つ	り
鳥	懐	年	柳
尾	髪	成	た
は	も	か	し
松	り	あ	ら
を	た	ら	ぬ

朝熊伊勢十朝熊林三西行
谷下異本三句誤駕甚

宇波女女行ぢぢ八音
是日連句十五

平家物語小督ノ局十ノ面影
五

朝熊 且宿成きふとく
念佛 念げは秋あまの
極楽 生か花を住まは
赤名を 橋のあふ呼る
傘の 内を付はなる雨の
朝熊 下る出家 ぼく
おと 西行 ぢぢ八音
釣瓶 ひとり 枝二人
世の ありぬ 局 深し年
記 念ふ こと 不 確 確 の 昔 相
ゆく 春 を せむ 竹 と 小い こと

昌生
李凡
重五
荷弓
李凡
百桐
荷弓
昌生
多相
重五
昌生

奈良阪を良北ノ合殿若路
んぎナリ
うらの清きうの清き若所
細十ナリ
高洪並節ノ古字ナリ
はるくハカリニテ清水ヲ離テ
ヒミナリ

九月十二日山城葛野郡太秦ナリ
祭文奇ナリ

才も足も名もろりよゆく

李凡

三月六日野水言ふ

旦藁

ぢぢ飯や畑うら山のひまけら
おとろろり 雲むかへくらの鐘
春の 籠 花 伝 ありら 鐘 若 若 若
口 長 ぐ ぶ 一 き 清 水 せ づ の 音
松 風 よ ち ち ち ぬ ぬ の 酒 の 破
堂 踏 踏 踏 踏 踏 踏 踏 踏 踏 踏
堂 向 け た 春 祭 る こと 々 々 々
若 来 ち り ち り ち り ち り ち り

野水
山人
羽生
執事
野水
旦藁

法華ノ三車一乘心カ
鱈又大口魚

一本故ヤリニ誤ル
千日万日ノ田向ナト云フハ寛文
年間ヨリ始ルナリ

和名抄ニ鮭

筑紫人ノ浴衣伊勢人ノ帯ナト
東西國ニヨリ入来ルナリ

表町出でて二人發新しん
曉ハコウ舟車ゆくすぢ
鯉ノ皮て大津の濱の今をり
何やらすんお國の聲
秘かちた舟斗り松板をりて
萩ノこたふすり 万日の東
里人ノ薦を施は秋の音
月ちつき浪ノ音石ノあく橋
あらひちる本の松の鮎とらむ
泥ひあむむる春の湯の中
のこら 也筑紫の袂停務の帯

越人 為字 墨葉 越人 羽笠 望水 越人 羽笠 望水 越人 羽笠 望水 越人 羽笠 望水

唐ノ眉ノ番アリ和ハ又異ニシ
テタヤマリ且事物紀原見
エタリ

内侍のえらふ代々の眉は
物思ふ軍の中をに御小
名々うち粟と命ナト上ケ
大年ハ念佛唱ふるえのす柳
このおとをふよきを降こ
船夕のそふ葉のためし枸杞を
結しよ廿日をやま麦の粉
一板かる言ハ言かあ守たれや
あを魂やうるきけふき能月
陶突りも元能なる吏婦にて
喜自袖小は二奇いやくく

麦の粉ハコカサリ
千瀬阿闍梨ノ任玉ヲ攝津金
龍寺ノ面影カ
魂祭ノ報恩盤ニ月十五日五月全
七月全九月全十二月全晦日

越人 為字 墨葉 越人 羽笠 望水 越人 羽笠 望水 越人 羽笠 望水 越人 羽笠 望水

越人 為字 墨葉 越人 羽笠 望水 越人 羽笠 望水 越人 羽笠 望水 越人 羽笠 望水

此巻月四出夕三句短句ニテ
長句ニ廿九日月ヲ出セル一奇ト
云ハシ

且葉カ家ニ贈答ナリ
ウレ一葉忌ニクナリ又夕
レタルヲモ云

田を拵てむ見る里はせれなり
カウゆを法よ一申一の子
滝や三井のまぢの流とよ
高びくろのこを雪の如く
足つけたり廿九日月空を
君のほろめみ氷ゆえまけ

羽星
望水
思葉
城人
首号
羽星

二月十九日且葉の田あき
桂のさすてゆるしき森見外
歌にあたるまゐるのこりり
蕨煮る岩木の真を言ふて

望水
思葉
城人

渡
磯
音句格

鏡、鏡ノ字ニアラス異音ナヤ
ウレハ借字ニミ万葉ニ鏡ト
カタ正シ

檀木堂三十二句ノ後ノ終リ

まろく人を見ざるものこ
立てのる渡りの月の影を
芦の種を招る傘のの端
磯際ニ施餘鬼の信の集りて
岩の百より花見ゆるア
雨の日も瓶焼やうし煙をた
ひだるき事も松のひらつみ
尋よも坊主を信守 渡あうて
解りてやわらむ枝おすふ松
と雪ハ更たうとそやまぬ

首号
冬文
執事
思葉
望水
首号
城人
望水
冬文

同十九日岩の字 室ノて

從四位下能登守源順和童五歌
仙久和名抄作者より此抄歳
時部モアリ又菊ヲカケヨモキト
リ

四の宮川原山科三ノ唐輪八
ナリ

草抄ふる一本草二誤
紹興大黒庵ト号利休ノ師也
永祿元年没ス

五ノ八會ノ詩ナリ
井蛙抄三葉を折て滝の落る所を葉
き待たれ水の音も聞えぬとあり
なくとアリ

咲けけの香木もをききり	秋のわかきよか	初冬の静けし	別の丹子も	泣きも	春の色の	永日や	筑紫の子	詠	道	滝壺
かき	か	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ
哉人	且葉	冬文	冬文	且葉	野水	冬文	哉人	且水	冬文	哉人

岩苔和名抄卷相ノ俗名
ナリ

帛、繒也今、綿ナリ

此まゆゑに非を別ラ云云カ
帛、衣同訓別字

志州鳥羽

雑居山城愛宕郡大層ニリ
筑戸祭、近江坂田郡ニリニ
變リ異本一本トモニ云々ト
化ス非ナリ

岩苔とりのひきふきけら	むきわりの	蓮二枚も	朝毎の霧	暮打を	風を	あ	は	あ	餅
ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら
且葉	冬文	哉人	且葉	且水	冬文	且水	哉人	且葉	且葉

一卷中ニ若木岩間若木下
化見ツシ

岨字典ニ石山巖上世

後鳥羽院ノ御宇ノ番銀治ノ
面影カ

山をみおぼゆる人越ふ日子
是れてらば重花鳴也 為字

追加

三月十日舟泉亭

越人

山ふきぬあぶちを岨のふたは橋水
橋水のまよあま岩橋
きつらきや餅酒ササすき雷あて
河の舟のたれ小流ふ土築
朔りを登まつ船治のつらめく
月たつき空の門をゆくあけ

舟泉
陸重
為字
舟泉
舟泉

昌隆里村法眼室永四十月十日
卒ま松のまのちのあや代り
ま此句云カ
木のち八門松太間ナ

芍薬園ノ貞徳別荘号ナリ

曙ハ明ナ揚再思カ詞ニ面色蓮
花似タリト云リ
白氏文集塔暖牀斜臥日曛
腰

ま

昌隆の松のあまぬは代のま
えの木のまの競ふまゆま
初まはま里半のまきま
まきのま海に程ありまのま
門ハ松首ままのま
解のま水おのまく梅ら
あくのま小ねまのま
曙のま歌牡丹まのま
獨るまのまのま
星まのまのまのま

利ま
まま
留ま
自相
舟泉
羽泉
且葉
杜橋
屏夕
春泉

きつふ子日たふ母の日十九
云ナリ

古池の冷ハ貞亨三年ノ作ニテ
是ヨリ正凡ノ姿情定リテカ

教トナリ天々を任の詞も
こはト云ニ因ルナリ

夕ふとも少松原らん牛の夢
 朝白二分柳の動く白の春
 生ぬて野のまひくまをまのま
 芽摘ともあけを海なき歌ハ
 のれとも人の許へめも
 只この世はる壁のや——夕露
 古池や桂飛あま水の音
 傘張の睡りた露のやとりの水
 山をむ垣松のの酒を如——
 あま理れて夢らうとま死くうれ
 越人 越人 越人 越人 越人
 越人 越人 越人 越人 越人

撰集抄 信濃國佐野といふま
む歴ノ々々云々人のあつた
是位の大由了ま

待の子夏夜を長きき曲り
三才圖會知古字鳥ト云かつ
鳥今ノ聞古鳥ナリかふく

三才圖會知古字鳥ト云かつ
鳥今ノ聞古鳥ナリかふく

是位は様を曲る席うら
 林麓有かく枝ぬまのく極中
 極木やう極のまを極の丸
 銭お
 藤の毛たうらふのまのう
 山畑の草播をけすす夕や外
 板ひらうはあふね松まをう
 夏
 おとくまの山の尾をまし
 かうまのまのまのまのま
 かつあを板屋の音戸の一里塚
 越人 越人 越人 越人 越人
 越人 越人 越人 越人 越人

鳴り

并慶文治五年 壬申九月 日本
山伏 鈴 撃 似 々 似 々 似 々 似 々
山伏 鈴 撃 似 々 似 々 似 々 似 々
上 下 中 下 中 下 中 下 中 下

老子 經 第 十 六 章 ノ 語 前 書
セリ

う 枝 一 枝 葉 如 枝 梅 の 心 ち ち

多 木 の 心 ち ち 心 ち ち 心 ち ち

傘 を ち ち ち ち ち ち ち ち ち

武 苑 坊 心 ち ち 心 ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

心 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

法華經ニテリ

萱草 五月 開花 六出 四垂 黃赤
アリ 和名抄ニ忘 草

萱草と 陰分 若き 花の色

萱草の 陰分 若き 花の色

萱草の 陰分 若き 花の色

萱草の 陰分 若き 花の色

萱草の 陰分 若き 花の色

萱草の 陰分 若き 花の色

萱草の 陰分 若き 花の色

萱草の 陰分 若き 花の色

萱草の 陰分 若き 花の色

萱草の 陰分 若き 花の色

萱草の 陰分 若き 花の色

萱草の 陰分 若き 花の色

萱草の 陰分 若き 花の色

萱草の 陰分 若き 花の色

萱草の 陰分 若き 花の色

萱草の 陰分 若き 花の色

萱草の 陰分 若き 花の色

越人

越人

越人

越人

越人

越人

越人

越人

越人

越人

天部 中六部八井筒屋在兵衛板
春日集 三田村市郎右衛門校
リ又一本八江戸三ノ翻刻ニヤ誤
字多シ

貞享三丙寅年仲秋下浣

神社考曰支那諸書指言蓬
萊者其本有三所祝州熊野
駿州富士尾州勢申り蓬左ハ
勢申り云云
前分尾陽藩士山本武右衛門
名古屋赤名町住檀本堂ト号

冬日春白集發句連句トモニ
大くサク花奇ヲ尽シテ實事傷
ヲモ有ニヤ

可羅野

阿羅野

尾陽蓬左檀本堂主人若分を
集を編て名をあらう聖といふはなま
は名あるるを去るは予もさうぞ
ひやうまひくせは郷は物癖を
まうくのまはあつて冬の日と
ひふそのうやう古蹟まで。春の日
十々せまかやうはるや衣天者
弥生そのうき。松橋の錦を
あふさぬ。棟名のおのさほ。か
風情よつて。いさゝか字をそ

阿羅野

永遊言空木綿ナリ
朗詠集ニ載せしれり其の
のちてあつたものなるのみあ
るふいといふ

山家集ニ在るは何れもあつた
娘百合の何れもつくともあつた
くつらといふ

野守の荷合サナリ
へらへらと年語ニあつた
サナト察シテ詞ナリ自詞ニ
名つらまのちらへト今世
多クカス誤ナリ

おちかふものもち格をよはぬゆふ
のいとしやうのちかふものなるのみあ
るふいといふ
おきかよたうて娘ゆりの何れも
つりてぞ存のちかふものなるのみあ
るふいといふ
世集のちかふものなるのみあ
るふいといふ
ちかふものなるのみあ
るふいといふ

元禄二年活生

芭蕉枕書

荒野

万葉ニ荒野ト見エタリ
荒生ニテ人氣ニ疎キ云
卷首ニ荒野ト標シ卷之二ヨリハ
荒野ト作ル
曠空也又曠也

荒野集目錄

- 卷之一 花郭公月雪
- 卷之二 歳旦 初春 仲春 暮春
- 卷之三 初夏 仲夏 暮夏
- 卷之四 初秋 仲秋 暮秋
- 卷之五 初冬 仲冬 歳暮
- 卷之六 雜
- 卷之七 名所旅述懷戀無常
- 卷之八 釋教神祇祝
- 負外

曠野集卷之一

貞享六年三月七日辛

花三十句
よりのふて

採川首首色すのふすまのまや
なまらんこらふまのの四万
の山女端

あはれをくくをかりの芳野山	貞堂
あやしくをいそぐるまのあま	治通
あまらう氣たのく花の林の形	信徳
まれの山やまともうはつて歌よき舞	晨風
あまはしそをの波の鬼一丸	友五
山里まはるものまのまを丸の形	出白
何うそをえんる人の長刀	玄春
まののまをすまのまをまはる	聖水

宗鑑譜州琴彈山辺住三夜
庵下三狂歌ヲヨメリ
上はまを中はまをなげ下は二夜
二夜はまをハハの下のあ

忌ニ又禁忌

一本はまを二作原本おとしナリ
おまの假名ノ誤カ

むの中下石引てあまかひをき	龜洞
下への下はまをまをれんむの富	越人
むの山常あまを枝まなし	一井
見たり一あまをまをなうぬむの滝	優似
足身のいろはあけをりむの時	麓彈
ちるまを海ぬまをんを	舟名
なげまをまをまをまをの陰	胡及
まのまをまをまをまをの	毛虹
味赤のまをまをまをの百	津ト枝
あまのまをまをまをまをの枝	鷗歩
まをまをまをまをまをの	為号

鹽

偷安浴ニ云ユキナリ也

和名抄ニ柿林ニ同シ

絶俗中必喜式和名抄ニ出

飛瘡の泣かぐえゆるも免れ
あふけを如風車賣むの時
まよきこく津くくはあろ成
山あいのむをうりよんがたり
おもーちや理窟をうりよむのそ
なうあゆむをうりお物も能
福あふ友遊むりりきの山
まをともたり清ある屋上式
そがくそまのむえよ能やま
酒のこほくる人の強み
月ももちこく酒のむひりり成

傘下
為道
たつ
心苗
誠人
聖水
冬松
冬文
為子
芭蕉

二十句トレットモ十九句ナリ落
句ルニテ可借

延宝六年ノ新道集鎌倉
ト云ナリ

ある人の心あはれ
檀の木をよかきそぬすくく日
杜宇二十句
時をこねあはれものこほるそ教やめ
る花の盛目又つらし中をくをい
目よハまき茶山中をくをい初うはを
いおろしを中まきりり留魂
福福の老うよりやあをきん
辰一子の名をけすまや時を
海や先を茶のほく壁迎のほをい
海をまけをけくうらまむのそと

季吟
素堂
釣雪
我人
松下
重子
柳風

拾遺集のつらさのつらさ
んわくきん渡のあつら
すゝ秋よりふ思見

あつらのつらさのつらさ
わくきん渡のあつら
んわくきん渡のあつら
すゝ秋よりふ思見
拾遺集のつらさのつらさ
んわくきん渡のあつら
すゝ秋よりふ思見

風鳥
吉雨
傘の
日
鈍可

心くきん渡のあつら
すゝ秋よりふ思見

心くきん渡のあつら
すゝ秋よりふ思見

心くきん渡のあつら
すゝ秋よりふ思見
拾遺集のつらさのつらさ
んわくきん渡のあつら
すゝ秋よりふ思見

梅舌
溜水
越人
昌黎

新月似鑿鐵又玉鉤 望月十
皆月見立ナリ

二日

足る人さちなき月の夕ニ暮 全

三日

何の足なきもねるるの月 甚差

四日

夕月夜行打りて志を一見 卜枝

五日

何日ともかゝるめなき 音の月 任持 一なる

六日

銀河又雪を流すや月のそら 玉晴 朝霧

七日

結ぶとんをけりてゆるる月夜東 岐阜 一奴

雪二十句

大津(まき)

自然居士謠 詠以夜の山影の
ワラホクイハトモ
トモクハトモ 再考アリ

加生九兆ノ初名ナリ

雪の口や新緑のく 秋の息 甚角

心さゆりむ雪をなまらけ 夕所ナニ 芭蕉

外ノ雪を履て踏むまき 菫 一丸 菫交

かきかきや雪のあま山岳の山 加生 加生

車道ニ雪をきき冬のあま 小春 小春

まろく雪をたかそくら 教を流むら 哉人

けり雪を戸明ぬるまの尾外 是幸

ものこけのぬらぬま雪のひらけ 松芳

コノ世ヲ聞工初華心スシ

大服点茶ノ名ナリ其式点茶
或清塩梅極ヲ茗碗之内而
合家飲之

洞窟
堅魚ハ祝語也古本賢ハ
書損カ

濱名橋ハ遠江國元慶元年始
架之長廿五拾六丈有ニト云中古
ヨリ絶其後猶地震螺拔炎イ
騷ヤ賤ナリ 麦厚シ田合ニテ

々々ノ老寂一カクモ 瀬 二うな

あひしく小松ヤを門におきちや

大服と去年の暮茶の白のや

管の聲 少すあれ年 男

傘は苗采からりり元方極

袖はりて松の葉繁るる松の妻

たてく足むるやうつる大かき

暖と美の初めやどろどろり

さつきの欠きたき名に怪魚

初夢や淡名の櫓のとのき

まづやまげ海階よりふの麦厚し

其松

松島

防川

昌勝

夕道

梅古

聖水

同

越人

同

号

鎮守參詣ニ梅ニ麦ナリ

巳の年ハ元祿三年撰集ノ年也

万葉の言を解 万葉の言

己の言 己の言

赤ら赤目くふまら毛こま

あふ式う宿まもあふや

初春

あふ菜つむねを木を割 畑

精出て指ももえぬら菜茶

七ふさをたきたうて泣子

女出て宿たらのあふのあふ菜

側出て袂のまき 磯菜

吾輩も踏してあふのぬあふ菜

司

俗

般齋

欠

越人

聖水

同

越人

同

号

膝より約る々をゆりの枝 若草

苗座題

若木

浅きくつとゆりのぬきをさす木外 舟

接木

つややかかきくさむらさき種外 傘下

核

咲の釣瓶をさす浅きくさむら 荷台

同

数深く膝よりゆりのぬきをさ 卜枝

若草

つよのつよの軒ノ端ヲ云

望一伊勢神路山華に住と守
武ノ風ヲ慕フ慶安頃ノ人
紙拾ノ音便ナリ也

白尾ノ總尾ノ雁鳥ナリ

若草相似らむハ草ニシテ
己ノ目ニ由リ置カレズ

さるるハいせの屋一とさるる 端水

同

喜のるすもを呼てことよ 菊彈

白尾雁

とゆりの尾つよけら白尾外 燈水

立白よりさすゆりの屋外 土蔵 壽生

すくすくを膝よりゆりの 舟 其角

すくすくを膝よりゆりの 舟 其角

すくすくを膝よりゆりの 舟 其角

土橋や膝よりさるるゆりの 燈車

蘭亭主人王羲之去晉時
人ナリ

純ひし

川ニ舟ヤのノはハアリシ

冬文
春江

蘭亭の主人は王羲之

去晋の時人ナリ

此は蘭亭の主人王羲之の書也
凡の如かき後のはやきき
何れもやの如き柳の如き
き柳の如きやの如き柳の如き
尺をかりはやきき柳の如き
すかれ柳の如き柳の如き
さうつては後をよむ柳の如き

春雪
聖水
越人
一笑
小春
一笑
昌若

さこれも髪の中をぬれ春
みうて髪の中をぬれ春
ふく風は牛の如きむく柳の如き
吹風は鷹の如きやの如き春
風はうぬれをわたり柳の如き
いさうき野飯をよむぬれ柳の如き
柳の如きやの如き柳の如き
春柳はもたれて通風車外
引いさよほくこらふ柳の如き
春の名をよむぬれ柳の如き

春雨
此柳
杏雨
松芳
校起
春雪
全
春秋
鷗外
生林

仲春

夏の菜は菜うかたの山椒は
 菜の花や杉菜の土まのあひり
 菜のむの産物なうらうら口氣
 菜のむの産物なうらうら口氣
 うらうらも足さる細うつ蕎麦
 万葉をば舞てうらうら吉田外
 格やもあそびうらうらささる
 廣唐よ一本枝ささるうら
 うらうらもあそびうらうらささる
 うらうらもあそびうらうらささる
 うらうらもあそびうらうらささる
 うらうらもあそびうらうらささる

不悔 長虹 傘下 清洞 去來 昌松 誠人 笑州 隆慶 一橋 老松

女院の御車ノ前ニテ奉ナリ
 御前ナリ
 古本不蘭と稱し作書損也

ずらりと山や暮らんまきまき
 五九の力くつゆるまきまき
 あふけきまきまきまきまき
 高きまきまきまきまきまき
 乃くまきまきまきまきまき
 手をついてまきまきまきまき
 啼まきまきまきまきまき
 あうつまきまきまきまきまき
 いくまきまきまきまきまき
 飛入るまきまきまきまきまき
 不圖飛て後まきまきまきまき

一發 聖水 除丸 一言 塩車 字繼 蔭松 誠人 去來 津島 松下

中ふ雲の唐紙カガミにふらけりぬ
 ころけを火の足出ぬ等あまのうま
 換楓の葉にふらけりぬ
 かや葉の中をさへぬるはけりぬ
 枯芝やま葉をさへぬるはけりぬ
 岩の葉もつらぬま土の葉は
 ねをさへぬるはけりぬ
 ほろろくの土をさへぬるはけりぬ
 草刈て葉をさへぬるはけりぬ
 一井
 楓
 梅
 秋玉
 石
 忠知
 岩
 野水
 舟
 鷗

安小冬三西河三と詞書有出
 ちりけり

乃襟のまきしけりぬ
 麦畑のくまのまきしけりぬ
 まきしけりぬ
 山吹のまきしけりぬ
 一重のまきしけりぬ
 まきしけりぬ
 まきしけりぬ
 まきしけりぬ
 まきしけりぬ
 楓
 大坂
 芭蕉
 聖水
 一枝
 日
 葉
 去来
 俊似
 去之

山崎六山蔵ナリ

燕の巣をこねり 荏ろぬ
 若くはよたて せねらる 燕の巣
 友減て啼 言わぬや 花の宿
 角落く せんくす 申る小 荏外
 せり清く せんくす 浦の 沙干外
 歌も子も 同 飲んや 柳の 風
 人重む 舟を 待たう 沙干を
 山崎ゆ 小を 候らぬ 躑躅外
 蹴ねや せりく せりく 躑躅の 毛
 篇方く 藤の すけぬ 粉舟外
 永き口 や 鐘 撞 ぬ ぬ ぬ ぬ

長如
 嵐障
 且葉
 燕外
 越人
 策六
 友重
 号写
 為心
 龜洞
 卜枝

煉蝦魚醬ナリ

首柏号牡丹花三覆上香酒
茶ヲ嗜リ宗祇門全ナリ大永
七年没年八十五

永き口や油 ぬぬぬぬぬぬ
 りまのあ せりく せりく せりく

野水
 同

初夏

こころわくわくせり物よものん
 天衣襟もをくくせりく せりく
 せりく せりく せりく せりく

首柏を人の せりく せりく せりく
 いふ香を せりく せりく せりく
 せりく せりく せりく せりく

嵐障
 傘三
 釋
 嵐障

宗祇法師ハ鬘ニ香ヲタキコメ
シト云

石草貞享五秋葉山吟
笈日記ニ一葉の一葉ハナリ
和名抄藜草又燕子花

コヤつうてん
鬘ニ焼香もあつて
又ハ

山崎

又ハ
つらつらとをまわらう
村の本の
切かぶの
さけ
ゆめ

芭蕉
一井
越人
石交
菘菘
龜洞
竹洞
鈍可

句集 芭蕉庵

くけ山や
上チ
枯色ハ
麦刈
麦か
去
鳥
大粒
ぬ

源川の庵

夢
玄察
生林
不知
鈍可
嵐
落松
李桃
東巡
吉次

河ハ水際平砂也

貞室十卷余ノ集ニ此句見エス
三ノ酒古諸説紛々未詳

三六

河を水たたくて水砂也

野水
大津
一龍

五月るよ柳きくも各汀うま

尚白

五月るよ小艇もちうぬ五月る

飛洞

岐阜よて

おさしりしきしき今精確外

貞室

おちりしりよて

おさしりしきしき今精確外

芭蕉

おちりしりよて

精の味うに海もまき悔也

若兮

同

和名抄二極

万葉ニ有リ有草紙ニ繪ト
まておちりしりよてとまて
山崎トヤリ
枕草紙ニ有リトヤリとまての意不
明ト大東の所ニ有リ三四四の意
のちのナトトヤリ文也カ

新あしを船も帰らん精細舟

越人

先舟の船もかきをぬ精細舟

薄見

曲江の船の見えぬ精細舟

梅餅

鴨の菜のええりあふりしりよ

路通

松笠の笠を身ぐるる夏空の舟

ト枝

和の船をかきしりよの橋の風

鈍可

蘭の香や泥よとくく音の音

同

控子や荷陰書人とうむらん

越人

流しや灯のこるる夏夜の船

藤巻

夏の花や焚火に兼足舟る里

旦暮

庵の留まら

無名抄ニ火おこさぬ夜りまら
つりつれとてんもささるゆゆ
さなりつりつれ
夕鳥や秋の吟十鳥掛集六
初秋中ノ目此にむらして下詞
書アリ伊達衣むつ十鳥古今
抄泊船集ニモ秋ノ部ニ出タリ

和名抄 楸 又 椴 樟

文正十一年下言カケリ

まぶはまきさふ夜り炭俵
夕鳥や秋の吟十鳥掛集六
夕鳥の志むむと人のまぶぬこ
夕鳥の秋の吟十鳥掛集六
山崎舟て夕鳥足くる聖舟が
名を原らゆ夕鳥よゆ言や

暮夏

楸も動くやうに怪の聲
その聲 楸のけはたむむなり
夕鳥よ夕鳥ぬく夜種うぬ
涼 さら板もやうぬ木陰のうも

涼 さらなるをくう入ら新
暑くも涼 やおのそむいり口
はるなるの砂あふぬ暑く木
おもしろいふをなかり夕涼を
飛石の石花やまの夕涼み
涼 さらや橋の下ゆく水の音
桃灯のまやゆり 涼の舟
涼 さらをやまぬる川辺に
吹くく水のとゆく道 涼の那
蓮見むゆきささるやまこも
暑くも涼 さらなるをくう

去来 為号 同 如風 俊似 全 下枝 未学 秀正 晨風 古梵

昌良 望水 傘の 法印

其角 芭蕉 聖水 借雪 市板 長和

釣鐘卅五月開紫花其形
扶釣鐘ノ如シ

河骨う水の目なり 活き外
とら〜と清水に水の古葉のや
をみきうて沙千の畔の清水は
遠あの中〜と清水に清水は
引きて〜と清水に清水は
か〜と清水に清水は
水垂をぬ〜と清水に清水は
雲干や暮を〜と清水に清水は
麻の露時あ〜と清水に清水は
釣鐘卅後〜と清水に清水は
釣の古た〜と清水に清水は

笑水 長虹 俊似 文潤 際月 尚白 一雙 卜枝 李晨 越人 素堂

雲居名希 膺妙心寺二世松
島瑞巖寺ノ住職 万治二年八
月八日寂

曠野集卷之四
初秋

ちら〜と麻川あ〜の秋の風
掃の葉や〜と秋の風
松島雲を〜と秋の風
一葉〜と秋の風
か〜と秋の風
男〜と秋の風
魚〜と秋の風
草〜と秋の風
釣〜と秋の風

越人 関解 仙化 方生 唐雨 芭蕉 文解 尚白

翁曰字餘りの内依の事いふ
陸工の言ハ言ハクエ夫
鳥のえののちをきか

白氏文集林間燈酒煖紅葉
間ハ温寒ノ間ヲヨロシキヲ云

かき孕ま鳥のさきりり 秋の暮
はりくと陸をさる 秋の暮
谷川や葉落さく 秋の暮
石印の暮もさきりり 秋の暮
斧の暮や幅幅出 秋の暮
麻の暮よんの暮さる 秋の暮
田と畑を指はたむ 秋の暮
山嶺々 康々 秋の暮
おの暮さるたむ 秋の暮
まのぬんと物いふ 秋の暮
秋の暮にはお暮みりき立枝

芭蕉
小春
益音
金平
ト枝
一松
一松
重五
其角
東順
林斧

元禄二年秋翁尋レシ時
此三

井
堰

素牛ハ惟然ノ初名

とておれく地をさふ者の表や
わらわらさるや 秋の暮
わの暮をさる 秋の暮
船もさる 秋の暮
素堂(ヤウ)の暮
さの暮の暮の暮の暮の暮
一木の暮の暮の暮の暮
木の暮の暮の暮の暮
まの暮の暮の暮の暮
おの暮の暮の暮の暮

越水
宗和
北枝
越人
防川
舟泉
坊及
曉齋

関の素牛の暮

関孫の兼行 永和中志津三郎
兼式元應頃名譽ノ刀五十リ
美濃多藝郡三住ノ

坊ニ喜藏院南陽院ニ喜帯ノ
寺アリ

きそ 石孫と云ふも志津を返 其角

より ぬきよ

きぬくくちてふよきかぞの坊の中 芭蕉

のそかりや望分の定法杖這早 一笑

暮秋

なまよとくく 柿 ちる菜のらき水 巴丈

去る氣のちぬそあーはをき 昌碧

山路のきく聖菜とて又ちるあたり 越人

一まや作ぬぬ菜のむき一りり 曉龜

為るるはは 此孫と云ふは 花よりよきをそ
漏法けくく 正徳出されりき

かちらけのひまをこへんをまや菜のむ 其角

影質帽子ハ鉢卷ナ公卿ノ名ヲ
フ物ト云ハ非ナ五元集續猿
蓑ニハ朝貞ト云ナ人ヤトナ
要九三

風声ハ天地ノ語ニト云ハ
三井寺ノ語ニト云ハ

三井寺ノ語ニト云ハ

名末の志津 人も影質帽子 同

かちらけのひまをこへんをまや菜のむ 二水

山路のきく聖菜とて又ちるあたり 伊孫

一まや作ぬぬ菜のむき一りり 千因

なまよとくく 柿 ちる菜のらき水 濃州

去る氣のちぬそあーはをき 加生

山路のきく聖菜とて又ちるあたり 路通

初冬

あめつちのまをくく ちる菜のらき水 湖表

京より人みやきけり

一まや作ぬぬ菜のむき一りり 尚白

此句テ風ノ荷ヲ異名ヲ取リ
風和字アリ

ちりちりき何おもひ出んこの夕

湯水

万句真似小

尺さうきふ人のやうに時白く

荷分

人を結くくる日午

夕暮を控定まう尺さう時白く

落桂

釣鐘の下降のしほきくれうま

炊玉

渡し雪まじり葉落る時白く

荷分

風に二日の月影をまじり

一髪

一葉を掃き葉落る時白く

同

木の葉まじり時を囲煙意

同

枇杷のむ人時まじり本陰く

同

葉のむまのほそくはく

李晨

梨のむまのほそくはく

煙水

葉のむまのほそくはく

昌若

葉のむまのほそくはく

同

葉のむまのほそくはく

一井

葉のむまのほそくはく

落桂

葉のむまのほそくはく

胡及

葉のむまのほそくはく

文鱗

葉のむまのほそくはく

ト枝

葉のむまのほそくはく

洞雪

葉のむまのほそくはく

一髪

古今意ハ甚横ナリ

中ノ帝ニテツリ鷹ノ頭ヲカク
ス物ナリ

和名抄ニ昔俗用大根ニ字

鷹ノ頭ハエ石きりまわく枯野外

松芳

風ノ吹ハくはれまわく鷹ノ頭外

杏庵

寒月

煙ハを出て度く月を雨らき

野水

あき清ハのち根あらふ月花外

俊以

仲冬

おろしハか鏡あつたまを敷く外

津島 勝吉

まら波とすまをたまを敷く外

津島 重治

橋ハをふるる薫子ハを敷く外

林斧

柴ハの戸をほくくちを敷く外

杏雨

棟ヲ和俗稱檀ト呼

雪舟雪車ナト見エタリ
汐木ハ枯ヲ遠タキナリ

い〜けし葉をあらせし霞ハを本

宗之

二葉のねせんハんのまをりまを敷く外

杜園

水ハの葉のまをりまを敷く外

務吉

深ハき池水はつり歌きり

俊似

片ハきやうて松葉ハを敷く外

除地

打ハまわく何れハを敷く外

花舟

無題雪舟

峠ハより二雪舟ハをあらせし霞ハを本

岸弾

ぬつハとくと雪舟ハをあらせし霞ハを本

為守

根ハをあらせし雪舟ハをあらせし霞ハを本

長如

るハをあらせし雪舟ハをあらせし霞ハを本

一井

魁ノ種類甚多ニ

登ノ赤ミツク火トモスト云

雪舟引也体心もあふまて居る
 波けうておろく言わりの
 吉海や羽白黒鴨 志知
 舟ふたぐりおろく言わりの
 船鮮もろくもあふまて居る
井をぬる者いふ月さく米つくをこ
 ちそ程なり
 汗出て谷も突あむ 志知
 海嵐揚り壺埋め多き 志知
 炭竈の穴ぬきくやら 志知
 篠節をほく多きとる 志知
 火とけりて米もよちりぬを桂

魚洞
 合占
 忠知
 龜洞
 村後
 志知
 利重
 志知
 隆車
 賀一突

樂天間居賦 間居而後倚其柱

餅花餅搗ノ時其若柳花
ケ花ノ形ヲス

翁と越人同道テ元祿元年
捨月見紀行有
本名ハ柄澤世の人ノミヤケハ
の字アリハ柄澤三河ノ贈リニ
ヤ又越人カ土産ニセシヤ
和名抄村

いつけり一庭起さそつとを
 冬籠ゆくとくそんはら
 歳暮
 餅つとね田よまきん酒らふの
 吾書てよめぬものちうとる
 餅花のほはすけちりぬ
 ともさく指はさる茶畑
 煤拂い梅はまけりぬ
本名の内をみかめ人のミヤケハ
柄の字いふとあふまて居る
ちそ程なり
 年の暮抄の字いふとらうと

龜洞
 芭蕉
 堂下
 志知
 野水
 龜洞
 一突
 花字

田作のまろ祝語三年用意
作也

年中行夏歌台又公夏根源
出於三撰より歌八巻
年記よりよきもの種々ありハ
つらへつらん者たぬて
幼稚ハ菜子ヲイヘリ

春日祭三月上申日
夏前より此神ヲ奉ル
だんまらつらん者たぬて
石清水臨時祭三月申日
南祭ト云

門松をうつく蛤一巻
田作の麻進よおの字を
曠野集卷之六
内習
重河

雑

年中行夏内十二日

供着蘇白散

ゆきけちやも居る種をたぬて人等

春日祭

年々く島庄の飯の答りや

石清水臨時祭

皆喜もあつらんや

荷号

兼和年四月於清涼殿始テ
行ル

葵付けのハ加茂ノ競馬ナリ
東山山西山ノ寺ノ法師
原ニ施スナリ

万葉集三山王憶良
菟之花乎花葛花鬘鬘之花
姫前志又藤袴朝良之花
七夕草ト云ルハ
駒迎八月十五日也而依米
御國忌辰用上自率信濃駒十
七日甲斐甘武藏丹波野駒
堀河院中時向嵯峨野撰虫
奉之

灌佛

くろの日や法皇の法不誦

端午

れも夜て葵付けの巻

施米

うちめくるとは米を食真き

乞巧奠

さる茶よりナラ子その宛

駒迎

瓜蟹も狐の海也豹お

撰虫

十月朔日行代衣節會

その年々々々々々夜の夜の西の
あつたあつたあつたあつた
十月廿五日 帳臺試云
翌日殿上御辭アリ
古本ありはけり誤り
追儻大舍人寮鬼とての上卿
以下とてを退く殿上人桃の月
一の矢ぞ射
白氏朗詠ト校正シテ誤字
誤ヲ改ル
白氏文集 卷柳無風花枝先動池
有波款水盡開 今日不知云云

草の葉や星のきらきらをりて

十月更衣

玉の衣かたうとかなるを

五節

年ぬき歳度指をたふり

追儻

追儻や猫よとらう鬼の面

詩題十六句

今日不知誰計會

春風春水一時来

おる添水はくちまの風

添水

同 卷十 白片落梅浮澗水黃梢
新柳出城壘 上 畧

同 卷十 春來無伴閑遊少
樂三分減二分 下 畧

同 卷十 花下忘歸因美景
樽前勸醉是春風 上 畧

同 卷十 留春春不住
春歸人寂寞 風起花華密
朗詠云不駐 在古本下當 作

同 卷十 況茲孟夏月
清和好時節 微風云云 古本微作
微風吹袂衣 袂 袂

同 卷十 池晚蓮芳謝
鰓粉竹意深 上 畧

白片落梅浮澗水

水色のこもふけくち梅の

春來無伴閑遊少

をまらぬあそびのやまはくはくま

花下忘歸因美景

花のこもるひかりさやまの下の

留春春不住春歸人寂寞

のまもりのほのやまのこもる

微風吹袂衣不寒復不熱

微風吹袂衣不寒復不熱

池晚蓮芳謝

同 珠 井 暑 月 云 上 暑

同 珠 大 抵 云 上 暑 古 本 抵
底 二 作 凡

同 珠 三 夜 來 秋 雨 後 云 下 暑 古
本 凡 雨 二 作 凡 書 損 凡

同 珠 十 長 恨 歌 二 遲 鐘 鼓 云
朗 詠 鐘 漏 二 作 凡

蓮の島も水たまりを来さず

暑月貧家何所有客来唯贈北

窓風

涼風とて切ぬさあけり水の宮

大抵四時心總苦就中斷腸是

秋天

雪の旅をなする所秋の空

夜來秋雨後秋氣颯然新

秋の月啼て瓜よぬ今も何

遲鐘鼓初長夜

耿耿星河欲曙天

同 卷 十 殘 燈 云 上 下 暑 古 本 錯
乱 了 本 文 三 三 改 開 誤 力

同 珠 十 万 物 衰 壞 色 四 時 冬 日 最
凋 年 上 暑 古 本 增 了 懷 二 作 凡

同 珠 十 月 三 霜 葉 未 殺 華 二
草 日 暖 初 乳 漠 沙 古 本 二
華 二 美 二 書 損 二

同 珠 南 窓 背 燈 坐 風 散 閣
紗 寂 窓 冥 云 云

同 珠 十 香 火 爐 燈 一 盞 白 頭
云 云 下 暑

ひびききりひびききりひびききり

殘燈影閃牆斜月光穿隙

少きり二時也泣ききりあまの月

萬物秋霜能壞色

らる来やま都て尺心を秋の空

十月江南天氣好可憐冬景似

春華

こがしきり息つく小春外

寂寞深村夜殘鷹雪中聞

鈴多き下もすぬ村や雪の尸

白頭夜禮佛名經

一条禅閣庶民の文明十三午
慶去職人盡歌合ヲ撰ヒ玉フ
法撰述ノ書數十部ナリ

鐸字未詳

玉簪草

蓬髮

佛名の禮は獨勝く白髮外

禪閣の授のり一孫ひよもまら

みまら

鋸鏑目立

舟泉

かけらふのうらやまのつらうら

付木突

五月雪水竹もまじし人の家

釣瓶繩打

うらやまの海のこまら秋の里

糊賣

ねんねのきこりねんねのまかこ

馬糞搔

こか〜のねんねをまらねんね

李夫人

魂在何許一香煙引到焚香處

かけらふの控つけのりもらもら

越人

楊貴妃

雲髻半偏新睡覺花冠不整

下堂来

もらねんねのりもらねんね

上陽人

小頭鞋履窄衣裳青黛點眉

白氏文集卷四及魂香降夫人
魂夫人之魂在何許香煙引到
焚香處既求何苦不須更上
畧古本香字脱

同卷十長恨歌攬衣推枕起
徘徊珠箔銀屏遷延開雲
髻云云上下畧古本末字脱

同卷小頭鞋履云云
天竺末年時世粧上陽人苦
最多上下畧古本上ヲ昭ニ書ス
今改

細^シ長^チ外^ガ人^ノ不^レ見^ル見^ル應^ニ笑^フ

物を^シ笑^ハヤ^リ〜の^チま^カ侍^ヲを^シん

西^シ施^セ 宮中^ノ拾^リ得^ル娥^ノ眉^ヲ斧^ノ不^レ獻^ス吾^ノ君^ニ是^レ愛^ス君^ヲ

花^ヲを^シく^ラ桂^ノ之^ノく^ラ牡^ノ舟^ノを^シん

王^ノ昭^ノ君^ヲ

玉^ノ貌^ノ風^ノ沙^ノ勝^ノ畫^ノ圖^ヲ

よ^クあ^らま^まを^シぬ^クそ^ノの^ノ柳^ノを^シん

一^ニ日^ノ苗^ヲを^シん^ク予^ノ侍^ルて

卯

祢^ノ也^ノの^ノ故^ノや^ハ佛^ノ性^ノを^シん^ク火^ノを^シん^ク

釣^ノ雪^ヲ

錦^ノ繡^ノ段^ノ 范^ノ蠡^ノ 呂^ノ仲^ノ見^ル
戰^ニ成^ル切^リ早^ク制^ス身^ヲ釣^ル草^ヲ輕^ク
動^ス五^ノ湖^ノ雲^ノ宮^ノ中^ニ云^フ

同^集 明^ノ妃^ノ曲^ノ僧^ノ李^ノ潭^ノ
玉^ノ貌^ノ風^ノ沙^ノ勝^ノ画^ノ圖^ノ琵琶^ノ
雞^ノ寫^ル舊^ノ借^ル恩^ノ疎^ノ宮^ノ中^ニ咫^ノ尺^ノ如^ク
十^ノ里^ノ况^ノ復^ス如^ク今^ノ萬^ノ里^ノ餘^リ

佛^ノ供^ノ二^ノ向^ノ宗^ノ佛^ノ餉^ノヲ

辰

杜^ノ多^ク生^ルん^ク陰^ノ之^ノの^ノ有^ル日^ノの^ノ如^ク

巳

諸^ノ沃^ノの^ノ戦^ノよ^クつ^クふ^ク一^ノ廟^ノの^ノ事^ヲ

午

あ^らひ^のよ^クと^シ監^ノ于^テ之^ノを^シ踏^ルは^レも

未

輝^ノの^ノ香^ノを^シ武^ノの^ノく^ラ舍^ノを^シん^ク

申

五^ノ月^ノの^ノや^ハ終^ノと^シま^ハる^クを^シ終^ノ作^ル

以^テよ^クつ^クて^シま^ハる^クあ^らは^レる^クを^シん^ク

山獸

鹿苗のよきときをばらおもひよ 樹水

野鳥

鳴実のりかけをふりあふ 火竹

里虫

枝をくわひりままり 罍際うぬ 合占

海魚

おもくろく 鱈引たり 魚の月 今

川魚

秋の香枯川くわ火あり 今

牛馬四足是謂天落馬首穿牛

火振ハ松明ノ光ニ魚ヲ伺テ取
「ナリ」
莊子秋水篇曰何謂天何謂以
北海若曰牛馬云

鼻是謂人

一方を梅きく 枕の礎本らな 越人

藏舟於壑 藏山於澤 謂之固

矣 然而夜半有力者負之而走

からせりら 砂をのちよるる 之

絶聖棄知 大盗乃止

ちうよも 時かほくも をふむ

鏡者天

ふくく 沈をふりの 火 奉 桂夕

鏡者壽

鏡の雪よき とき 死 一の 市山

同大 宗師 篇語ナリ 東 彦 字
鏡者 字 析ス

榮螺子
莊子 眩 望 篇 絕 聖 天 云 撫 王 毀
珠 小 盜 不 起

古文後集古硯銘 非鏡者壽四
鏡者天乎

作レハ伊ナリ同名ユエモト
云リ

一本ニ賣ルニ作レ非ナリ

近江

同國

鳥羽ハ山城

一トモニ名ニ京ヲてむフキ
了友の武蔵の國より一
佐々木角田門をさし
ひつれハヤウウてト河

美濃國 翠の山寺 翠の
翠の山寺 翠の山寺

芳野 芳野 芳野

五月 五月 五月

湖の水 湖の水 湖の水

井も 井も 井も

角田川 角田川 角田川

みり みり みり

十 十 十

十 十 十

十 十 十

杜國

重五

芭蕉

去来

一發

貞室

破笠

芭蕉

不尺十三夜ハ本朝ノ景物
ナリ

山城

尾州海東郡ノ地名ナリ
和名抄ニヨリハ孫ナリ

山城ノ名所

夕月也 夕月也 夕月也

九月十三夜

唐土 唐土 唐土

鴨突 鴨突 鴨突

眺実 眺実 眺実

むさ むさ むさ

酒を 酒を 酒を

唐土 唐土 唐土

むさ むさ むさ

免つ 免つ 免つ

免つ 免つ 免つ

免つ 免つ 免つ

越人

唐土

胡及

淡支

舟車

高白

伊豫

随友

洗悪

俊似

津島

一袋

星崎尾州

不破美濃國名所表のり
夜ヨヨミツト云フ義ナリ

吉野紀乃三和国藤峠ト詞
書ヤリ空ニヤサラキナリ

忠度ノ諱ヲ雜談集ニリ

二宮の不ニ美濃をツツカクきナリ

よ一聖もも多ク大雪のゆふふ

星崎の雪を尺ノヨクヤサクキナリ

松の白也不破の小宮のナク拂

詠

雪夜ノ上トヤサラキナリ

大和國名所表

志のかけ 遙トねくら旅者ノ那

松原里を成ト通リノナリ

川の入也舟ノナリ松の古

のナリ 松原の雪の生ナリ

満水

聖水

芭蕉

如行

芭蕉

司

夕松

一髪

号号

ひらねとほふあまねあ

あまのつたふ

時をたふしあまのつたふ

森ノふふ食ふくあまのつたふ

松をくらふくあまのつたふ

五月もや松原をなれ申のあ

夕まふのたふらひとふら

芭蕉士を送る

松原まふらけつらあまのつたふ

鳴くて袂もあまのつたふ

秋風ふくく松原をなれ申のあ

芭蕉

松原

松原

松原

松原

松原

松原

松原

松原

貞享五年芭蕉翁更科月
見の送別カ
以下七句同時

翁ト遊人ノ送別カ

多原ヨリ桂橋ノ月ニ趣キ
時ノ吟也

狩野家画ヲ曲物ニテシテ
筆洗リト云

秋の夜をきき 舟水

さきさきとけんとむらび 麻理

更級の月を二人はたしむる 芳兮

越又松をききて 芳兮

月より恨差つたよるのくへ 那水

おくれの秋の果は木の 芭蕉

物の葉はききぬ 秋の夜 政通

狩野橋より其角をきき 政通

よあつと云 政通

狩野橋より其角をきき 芳兮

ちの千子ノ誤ナラシ伊勢
記行ニ決りアリ

東海禅寺ノ後山ニリ巨名ニ庄ヲ
以テ墓表トス

とまり 福さう唄も ちの

八月は今も ちの

結きけ 一井

品川より 文解

浮庵の墓をきき 芭蕉

ちの 漢島

ちの 芳兮

いよ 聖水

夢より 聖水

其角をきき 聖水

雞鬼腸

三州伊良吉崎社園を養す

シテトカリテ之の宿ヲナレト

全情ニ結フ格ナリ

廿四孝ニ曾參鬻指痛心ナク又

曾子從仲尼在楚而心動解而

問母母思爾鬻指云云

和名抄ニ奴僕

九月十日孝事のちりき

かゝれおやのあまのりやいづれも

ころあまをさむる茶の地種

人のいづれをたつて

されどそたれなき侍の二葉の宿

旧里の人のいづれをたつて

かゝれおやのあまのりやいづれ

海金建七もふりき

若菜のちりきはあまのりやいづれ

人のいづれをたつて

故一節おくり

嵐雪

芭蕉

社園

越人

魚

魚母云暖甫正字温

尋常ノ句ニ憚ニ度

一有妻ハそのめナリ

魚母云暖甫正字温

古のりやいづれをたつて

かゝれおやのあまのりやいづれも

ころあまをさむる茶の地種

人のいづれをたつて

されどそたれなき侍の二葉の宿

旧里の人のいづれをたつて

かゝれおやのあまのりやいづれ

海金建七もふりき

若菜のちりきはあまのりやいづれ

人のいづれをたつて

故一節おくり

魚

嵐雪

芭蕉

社園

越人

越人

伊勢 一有妻

子規の南時釣釣悲三アト云

堀川百首むろ一及一妹の垣
根はさきさきうはをれ交りの
ナミヤのこころにて
長恨歌回頭一笑百媚生云
云

きぬしや余のうらうらもわくきん	除尽
故を出て母教よとてあきとれ	長和
虫干の眼よとまきらさうら	文潤
むし干の袖着る女この身	冬文
さくけえし妹の垣根はさきさき	心棘
六宮粉黛無顔色	長和
青宮の梅妻清きや月の影	尚白
一知さうらん竹のぬるをうら	尚白
さきさき折ふ	尚白
つゆをりしあきとれし女郎心	尚白
志うけうらふあきとれし女郎心	小春

越人毒妻の羈まつとまれば
云とまれば不契ゆせ時アト
云

衣より男女重子置ニ衣別
ニ取分ツ云

守武 天文八年八月廿日
雑談集ニ此句輝世ニ非ス只観
想ノ吟ナリト

禅語ニ生死事大無常迅速

妻のなめりしは清くはし送り	越人
松の舟志くく旅のよきなり	俊和
あふまふ大煙をのぞく女	舟名
うらうらあふ巨煙をのぞく女	岩家
山細小舟おもとせや	松芳
さぬををきんよとてとらり	冬松
おそろしきぬしや	昌黎
無常	
末娘小	
あぬををきんよとてとらり	守武
無常迅速	

嘆つておのつてはるききりの嵐は 傘下

未だ子

環 元順

南無如来多く其の明のそとを
板敷の浮敷を人の方より

多ふつひやうき

橋のかきり 息をぬきをりや 為守

やうき追善ふ

京 玄舟

手のうしふかきり 流るる 夢の形
あふんきり ちたれをのちきり

あふんきり ちたれをのちきり 為守

世をきり 書の方より ちたれ

古今集より 橋のま
まかけいむりの人の神
をま
妹の年より

コ群は江戸久ナリ元禄九日
夜花摘集 追悼年回ホクア

山城貴船下 小町が墓下

死出の里入り

お月夜の桐の葉と 思ふ身 聖水

辞世

あはれは 燈籠一ツふまにコ 群

子おくれをるは

似て歌の 何らとをさかへし 一踊り 若松

一系おきり

さきや 少町を骨のんきり 若重

妻の追善ふ

をんきり 志の里に されるるむ 自悦

本下 妻の方より ちたれ

みて

秋の夜をよみての元り少雨はし 去来

コ糸のまきりー後

その人秋の影 ちりー秋の影 其角

母を思ふ秋の影

をよみての秋の影 尚白

阿る人の追ふ影

埋中も秋の影の意をたもと 芭蕉

秋の影をよみての秋の影

清きつと秋の影をよみての秋の影 芭蕉

冬辺の影をよみての秋の影

曠野集卷之八 加賀 少云

秋歌

伊勢子

神代のおもひもかけの秋の影 芭蕉

母を思ふ秋の影 芭蕉

西の上人ある秋の影

をよみての秋の影 芭蕉

おきりー秋の影

連朝の影をよみての秋の影 胡及

くぐり首の影をよみての秋の影 松尾

木履をよみての秋の影 杜園

つらさをよみての秋の影 冬松

金葉集神代のおもひもかけの秋の影
つらさをよみての秋の影
けぬの影の秋の影
上人の建文元年二月十六日卒
五百年忌元禄二年

其まはるの秋の影
仁王の左の密迹金剛右の那羅延ト云

五元集三日輪寺の傍に蓮花の
ついでに小室を築いてアリア
リ

慈恵大師元三大師ノヤ法華
八講一日三卷ヲ講スル事也

序品天雨曼陀羅華云々

六十二
其角

貞享成辰の歳瑞生一日

東照宮の別當僧正の法房に慈恵

大師近府執事法華八講の法

よりそまらうなれ種少まらうて

序品の心を

女房の種少ふらうて法華多れ
越人

多くそ前あり 竜女成佛のそま

多うてまらうたれを鼻かむあつ

志たれ

詞書ヲ要句近津華授姿
連多品ノ意ヲトレリ
ハハの五ハ草ノ名

讃州

ふらふハ不便カ

江蘇ハ祥洞家ニ夏ニ修持アリ

白重表裏白堂平指史ノ
時著之

かろくとそらふらうてや厚い
同

観音の尾上のたのふらうて
俊似

古きやつとさむ待の萱草
一井

八島あり

海士のふらふらうてふらうて
伊豫 千回

あつとらうてふらうてのふらうて
一井

友山や木蔭のふらうて
燕葉

ふらうて

階佛のふらうてふらうて
芭蕉

階仏のふらうてふらうて
尚白

ふらうて

十如是相性體力作因緣果報本
求究竟等事

大乘經中三此語多三

あぢかひ金會三曼ハカテモ
ルキ上サ煉花ナリ
石籠ハ蛇籠ナリ

猶の如し儀をありの清山水

一香 一質 一美

十如是

おもふやうなるを濁る清水を濁

有分

即身成佛

友かけの唇寂らふんの佛うれ

香益

石ころいや俗の縁をな夜ころも

扇淨

おもしろくや門もてあはく縁縁鬼柳

有分

おかけの空をまわりのかきき

採丸

石籠子施縁空の桐のくぐれ水

文里

魂をうよより海をよのり

重洞

回向文 願以此功德平等施
一切

四時景物ハ定家卿十二月花
鳥ノ内ニ水雞ノ鶉有レニル
カ古本ナリハ鶉ノ書損カ

魂をうよより海をよのり

ト枝

揺ゆのりらるるんねのかけ

約雷

平等施一切

揺ゆふもり人ささくのり

信似

稲妻よち佛をむせや平水

有分

垣越え引導歌くを成来

ト枝

阿の人四時の景物を水鏡に

懸るも空不國志を感して

おもふなるを

乃くぬあはら佛をうよのり

有分

阿の寺の縁のり

二ノリ言ふニテ秋季ヲモテ

燕も御幸の鼓之りりて 其角

冬も出で坊主をさしや月の廿 一井

鉢の子も木跡をうらむ法師の 卜枝

人のとよふ所をまむんら

はるよすまむんら

かき又とぬらり一町目 鹿塚

漁舎の安國福ちか

そき法演やまふまららん 越人

古き書り書

曙や伽藍しりのきる屋 号分

同

松葉谷日蓮上人四年龍ラ

千鶴、秋葉隠逸傳ニ出リ
五元集ニ天津ノ駅ト前書リ馬
ノタリヤハ設法ナリ
藥王品法華經ニアリ

微雨

雪おやかか二玉の片腕 俊如

作りニあそころされんきり雪佛 一井

能く病よる人ぬきいらや飾多き 文淵

千歌うるもかせり一年のくれ 其角

藥王品七句

如寒者得火

ちるらみ稿の暖くら南の風 胡及

如裸者得衣

雪の日は酒樽移ふ阿すのち

如商人得主

双六のおまひをむつりうま

高砂ノ謡ニクモ代ノ標ヲ
板ノツクリニエトアリ

言の尾川渡り 足さきくふり
流の流の本流葉の中は桂の
おとさき 神奈川の中は通つる
言の木の打をくく 大津の
破扇一度はくく 高松の
川原と壱すきく 高松の
にかふしや里の多岐 針葉の
は月のえはをいこふ 針葉の
をきくや 針葉の 針葉の 油の

若字集納

李松 岩白 高白 針葉 油の 針々樂 利音

鈴鹿川伊勢國八瀬川ノ

肩衝
つ 隠れを名をせしむる
浦のつくり 伏せたり ぬき津の
此国基

續後
ふくや 何屋の山に 杉の
葉の代も 八かじ 鎌倉方大臣
古今昔 昔 青海苔 書損ぬ然
今改

此の方と 高松の 針葉の 針葉の
鈴鹿川 杉の 杉の 針葉の
かたが 針葉の 針葉の 針葉の
杉の 杉の 杉の 杉の
肩付ハ 針葉の 針葉の 針葉の
若字 四十の 若字

水 岩白 高白 針葉 油の 針々樂 利音

古詩 巴東 峽猿 猿聲 猿鳴
杜甫 秋興詩 夔府 孤城 落日
斜 每依 北斗 望 京華 馳 名 下
三 昔 漢 秦 樓 虛 隨 月 榭 下 巖

花 下 不 能 飲 醉 人
一 清 子 云 十

古本 鏡 書 損 字 典 三 棧 形 如 箕

の物語をうら虎は追ねる人ありて
猶多きを度しきりし 疎のおるふ
庭のうらむる子たのや 猿をさすて
字をよむる三たのの涙をさすも 冥の
字を杜のころさすも ちや 猿をさす
をさすて

素半

この文人はうつくしくそけられし
一人 兼 さいくも 吟 して

野水

かきとく かしら せ 出 筆 一 の 後 矣
棧の跡もさすらふ 志のすまて

荷兮

和名 砂 糶 以 糶 和 米 煎 餅
今 オコシヤ

唐 ころ 山 小 倉 元 山 上 三 三 三
祭

大原 十 田 興 行 三

もの 柳 舟 ちる おの 米 一 舟
門の石月結雲のやまうひふ
風の目利き初秋のそ
武士の二層もわ山も海もさ
志をうらふつて 漕のつる者
袋をうら 漕をうら 出れ 米のこ
づぶさやう ねくさる ちる ちる
立一り ねくさる ちる ちる
ふのうら ちる ちる ちる
娘さす 一 舟 様 ちる ちる
阿さる ちる ちる ちる

水 人 兮 水 人 兮 水 人 兮 水 人 兮

利根川水源上野ニテ関東ノ大河ナリ

井ノ玄猪ナリ和名猪ニ豚ノ系也

源氏若菜ノ巻柏本右衛門吉事ナリユリ字ニケ所打越ニアリ寛保ニヤ

高の身ノ泥のやうなる物おき以
秋をたふせしとて盗人の事
ゆゑやう西も東も鐘のなり
空よりたうたる利根の川舟
舟の白紙てゆくそとかなも
舟より水と雨減らちう是て
ぶらぶらとまのふれ市の鐘
狐つきまや人の足るらん
杉木の船乗りのつらと
さくやくさうの皆さえつる
月のかけより合ふとては
く

人 人 人 人 人 人 人 人

歩鶴ハ人ガヒ鶴ナリ
万作ハ豊臣秀次小性ニ事ハ
將軍譜ニ見ユリ

激取り

秋よちるるらん里の海痛
露られ歩鶴あはるる言ふけ
うはらと志のゆる破のそあは
かこころる凍の涙こぼれし
火若のこねてまのあつまこ
かこまのんをよと人のまら
水せきとるる池のかんさ
むさうりたもよと空らん
控えとるるな加格とる
墨とるる正月とるる
大根とるる干ふとるる

水 人 水 人 水 人 水 人

遠沙や詠ノム治定ヤマ
標ナリニシノホラ云

涼ヤ歎美ノヤナリ

よきものナリ

榊

遠沙や詠ノム治定ヤマ

龜洞

涼ヤ歎美ノヤナリ

荷分

よきものナリ

留岩

榊

聖水

遠沙や詠ノム治定ヤマ

舟水

涼ヤ歎美ノヤナリ

約雪

よきものナリ

草

榊

龜洞

遠沙や詠ノム治定ヤマ

荷分

涼ヤ歎美ノヤナリ

留岩

よきものナリ

聖水

榊

舟水

遠沙や詠ノム治定ヤマ

約雪

涼ヤ歎美ノヤナリ

草

よきものナリ

龜洞

榊

荷分

遠沙や詠ノム治定ヤマ

留岩

涼ヤ歎美ノヤナリ

聖水

よきものナリ

舟水

榊

約雪

遠沙や詠ノム治定ヤマ

草

涼ヤ歎美ノヤナリ

龜洞

よきものナリ

荷分

涼ヤ歎息ナリ

あつたれハ偽ニナリ
式ヤハウタカヒナリ

慶長ノコハ類髣ヲナリ
法輪寺ニ

呼出シナナリ

遠沙や詠ノム治定ヤマ

約雪

涼ヤ歎息ナリ

舟水

よきものナリ

聖水

榊

荷分

遠沙や詠ノム治定ヤマ

留岩

涼ヤ歎美ノヤナリ

聖水

よきものナリ

舟水

榊

約雪

遠沙や詠ノム治定ヤマ

草

瀨辺ニテハ貝ニ緒ヲ付下駄
カハリニ履リ

瀑借字

けーつをとりまはるるあはり
 味もすくもるおぼへさるり
 美智の門をふりあけお新
 次身くくまあくくこうま
 去の朝赤貝をまきてあらく丸
 影えよ夜をむむの松を
 きけふきや瀑を穿る水をき
 そらおもくくき山口の家
 町をゆくぬまらのおもあ
 菊のうらまふまふる戸の口

七十三

水

客儀又傾カ未詳
不祥

大和長谷

頼中古轉ニテ物憂ニシカ
衝張強梁ナリ

引控車ハ琵琶のたぎまで
 阿ふま智くも人のかりか
 舟の秋旅のまきまき出るち
 一帯のまきまき一帯のまきまき
 初寄るまきまきの繁の防まき
 菜畑ふむまきまきあけく
 土藪をくくくまきまき
 卯末おまきまき袖をぬき
 通後の実張をけりて
 ら信ふあきまきまき
 代たるあきまきまき

水

源氏物語 正月より二月迄二
月迄ありのちの夜を夜と
七月より十二月迄二ヶ月迄
らん人ふる葉の聲を夜と

井蛙妙顯照ハ独鈷を持寂
連ハ鎌首もつけ歌論セリ
六百番字合ノ時ナリ

燈ノ俗字

あけよらうやせとまむくつき
森をうらちう文字のゆむむ
むの聲よこころのゆき涙を
若りの粉のこしきまのせ
打むれて浦の苔の砂千冬
内こもひりて 松田ゆら大
破さりの水ぬれをきけをぬや
多くあつこころのゆき
歌のませ 楓 鐘 首 末 末 末
すく 秋 去 の 時 ち り の け り
灯 臺 の 油 ぐ ぐ ぐ 押 ぐ ぐ

同 下 同 人 同 下 同 人 同 下 同

詩經風ニ九月叔苴麻子ナリ
誤字カ原本草書ノ苴ニ苴ニ相似
タリ 諸説紛

信濃ノ地名

百万ハ詠曲ニアリ

花春ヲ花ノ跡生ト取ナシテノ
揚句ナラン

白をおこせハまうくく けを
吹風よあつこころのふらりと
半ハハこころの 葉山の 秋
むつくと月をぬる 魚の銀よ
人の清ふハまうくくも那
まきりくく瓜や葉ををるの込
干さるる葉のこころふ 町中
おろくくと小法師の木の屋町分
皆回 春ふ ナ ず 春 伴
百万もくくもあまのまのま
田楽きれて 櫻 淋 ー き

人 下 人 下 人 下 人 同 下 同 人

深川の東

声のなきかきさるるもくや、歎息す
 諸説紛然万葉に於て、秋草帝
 三石の事、古くは、すそ、あ
 これ、せう、トアリ
 和名抄ニ蘭蕙ノ二字ヲチハカマ
 トヨリ、今、建蘭ニラス
 五石ノ歌ノ一トナク集ニ注セリ
 白氏文集卷十二長安古未名
 利地空手無金行路難
 くらむハ狂ニナリトトハ通
 音

居る極もまろつ子、さハから、
 酒、あ、の、ち、う、ふ、の、の、月
 友、陰、誰、窮、屋、ふ、を、つ、ん
 理、を、も、あ、れ、る、秋、の、夕、暮
 瓢、箪、の、大、き、を、五、石、を、か、り、ん
 風、を、吹、れ、て、ゆ、る、市、人
 何、も、も、長、安、ハ、是、名、利、の、地
 医、の、多、き、を、目、を、申、し、た
 是、の、り、と、河、走、の、向、き、と、豆、出、せ

越人
 芭蕉
 全
 越人
 全
 芭蕉
 全
 越人
 蕉

去、昔、ハ、掌、諸、蕃、事、并、僧、尼
 度、縁、事、相、當、從、五、位、上
 足、駄、を、う、せ、ぬ、句、前、句、ハ、略、ナリト
 後、祖、翁、主、ヘ、リ、ト、為、并、抄、ニ、リ
 物、磯、真、キ、ナ、リ
 連、也、其、那、の、渡、辺、抄、約、と、あ、り
 何、の、の、言、和、の、を、ア、タ、レ
 頼、政

ひ、り、を、結、や、く、春、の、花、り
 此、里、も、古、き、ま、ま、高、の、を、つ、ん
 足、踏、を、あ、ま、ぬ、る、の、阿、け、を、の
 き、ぬ、や、阿、ま、り、か、を、ま、り、や、ら、ふ
 風、の、音、も、ま、ま、ふ、な、の、う、ら、く、し
 子、も、つ、つ、ん、屋、の、居、候、も、ま、ま、ぬ
 り、の、つ、ま、く、ま、き、毎、夜、ち、う、り、や、り
 月、も、も、は、高、の、言、和、を、や、り、て
 雪、在、ま、つ、つ、の、の、氷、ぬ、き
 破、戸、の、釘、打、け、る、ま、の、ま
 せ、い、や、い、ま、ま、の、挽、割

蕉
 全
 人
 蕉
 人
 蕉
 人
 蕉
 全
 蕉

原本唯書損
齒齒和名抄二波賀美

眼又万奈布太

東鑑六文治三年三月一日豫
州妻静及母儀禅師自京来
鎌倉下略
二人静トイフ諺ニ女ニ静ト云
ノツキテお二人静一テ静
タルコトアリ
ニモ。何れおちち。つるを
作也トイフ奇疾方ニ人自
覺本形作兩人並行並卧
不弁真假者離魂病也
燦讀米トイフツツ上男ト
イカニヤ万葉ニ煩トイフナニ
同

原本熟誤字古詩二醉後

能く己まきく茶ハ水よりなる
清くすめて裾あけゆる衣
齒まきくくくく 曉のうけ
ねくく涙まきくくくく
静山前より静山をまきくむる
古採の離魂の燦のあまき
あまきくくく くる金二万五
いとわくくく 城地人をもあま
やけくくく くるくくくく
酒熟き再ふつくるくくく
魚まきくくく 月江に
角 全 人 全 角 全 人 全 角 全 人 全 角

耳熱トイフ私語ハナヤキト也
るめこの富士ハ須山ト轉
新勅撰賀らやきとむ
ハ袖はつてまきくくく
ももくくくくく
平家ニ西王母と云一人昔
ハあつて今ハナヤキト也
と云イハるものも名をのミダ
て目より見れ又列仙傳ニ
トイハルヨシマコト意ナリ朗詠
言語巧術鸚鵡舌
無情

そのまきの富士ハ海茶不林のまき
あまきくくく くるくく 一の瓶
鐘をまきくく 袖まきくくく
くきせふつけく 死ぬ人ハ快
一西王母在方朔も目ハ見れ
トイハる鸚鵡の舌のみくく
あまきくく ねくくく 衣ま
衣のまきくく くるくく かん
や、思ひおまきく ねくく 打外
米つくく 所まきく くるく
夕鳥おのまきく 版くく
角 全 人 全 角 全 人 全 角 全 人 全 角

兎葦賭遊

不形様ハ伊勢白子取ニテ
念者法師ハ男色ニ

和名抄 葛藤 胡葱
沖續ノ濱尾張ナリ築出島
居崎ヨリ笠寺村辺マテテ
云トリ

いづらの道をも尋ふ 強カ
穴つらよ登りてちまひ草枕
ひよわかさうて仔細のハ朝
満月みよみ様をまうらふや
念者法師ハ秋の阿きかせ
夕やれまうらふを紙衣若
弓まらぬの 実阿げの窓
月もくふ乞食の袴を垣ゆて
木のきくまうらふの 圃
むのきくまうらふを 縁
むらうぬ つき 換 隣 の 妻

全 全 人 全 角 全 人 全 角 全 人

我不聽ナリ

普面トモタ 叙後ノ事ニ

いづれも 兎葦賭遊
念者法師ハ男色ニ

あさらし 新酒ハ人の醒やまは
秋をそ定 湯 婦
月のお書き引ちんばおきて
か酒葉のま 日けよけ
も縁阿の工敷おうらぬ里の
川 越らまハ 城下 の さ
瘡瘡良の透とる 根齒のあき
唱 子ハ まを おろす
洞 ころを ぬれ の ころを せよ
後 ころを ぬれ の ころを せよ

岩

越 全 人 全 角 全 人 全 角 全 人

移りてらへとそ在鳴之 松

一井

一里の炭賣ハソクをこり
 かけひの先の瓶抄る 松
 さきくさや山を引は誘ふん 松
 肩衣そりき海は碇ふ人 松
 夕月のハ線もやき壱きハ 松
 多きよは銀をつらむ古志林 松
 里海く涌きよ二三日 松
 言ひり書ふゆきり世々き 松
 向れも涙よりの云みき 松

古今三ききんぐのニヤと四葉ト
 讀リ樽云正木ハ良枝ヲモカ
 小のきりる赤澤のユトヨメト
 幸種ハ正木ノ名ノヤル
 カ宮不引正木の細ト詠ハ云
 本のららる綱カ後撰歌ト
 和名ハ鮒鮒鮒皆同シ

昔の籠 ちき、切るとく文
 へりくま原記をくふふゆき守
 空ゆく花舟の越の雪 鮒
 何となく 鳴くあむハ打とくハ
 松とりのハ 皆 女中トナリ
 浦風ハ 睡吹ささる月 涼し
 又るもか とき紀伊の所 魂屋
 若者のき 矢射をさむの 産
 蒜くらふまのまきあり 松
 まの巻 何となくも 睡らん
 舟子の跡の 松 松

紀州名草ノ郡濱中村長
 保寺紀州家ノ御魂屋
 ナリ 六鴨羽手巻口之對

松及 彈井 及 松井 彈松 及 彈

珣碩近江瀬田人濱田氏洒落堂號以洒堂為名

莊子逍遙遊三惠子謂莊子曰魏王賜我大楸之種我樹之而實五石以成其堅其堅不能自舉也剖之以為瓢則滂落無所容非不可然大也吾為其無用而擿之莊子曰未子固拙於用大今子有五石之瓠何不意以為大樽而浮乎江湖而夏其瓠落無所容則夫子猶有蓬之心也超

後漢書列傳曰長房翁乃堪輿人壺中唯見玉堂嚴麗陽秋雪子規三春夏秋冬之

〔抄〕

江流の跡破。余の心もさかたけおとれり。是ハこれ水滸をり。海をこし。心をさすもあはれ。或ハ大程の造りて。江流をさし。さし。少々も。及たす。吾も。及の恵子みて。用るるを。つら。まをり。睡り。あや。ま。踏。踏。小。力。陽秋。雪。空のあけ。雲の影。公。

藻思藻ハ喻文ニ文思ニ同シ

元稹カ詩ニ壺中天地乾坤外

越人佐分利氏姓越智熊本浪土尾名古屋住享保未帰藩

かけたる。不吾知。人。尺。皆。風。雜。の。藻。思。を。し。く。ま。下。れ。そ。ハ。つ。つ。の。あ。ま。て。お。神。の。お。な。さ。る。こ。と。は。出。て。こ。も。を。云。こ。毎。日。は。こ。も。こ。も。入。

元禄三月

越智 越人

翁曰花足のつからせかし
居て終ると云ふこと

鞆皮又鞆 鞆は俗字カ
司召八月十日諸官入三爵
祿ヲ賜フ
和字并和名抄ニ四程
式ニ出ナリ

信濃國諏方
俗謂身丈尺称春此字也

花見

木のこゝろよけも鱈も様二つ
一帯のよかよよきとて来たり
旅人の風かまひり来ると
こきも取れぬ古刀の鞆
月結く飯の白煮の目石
粉白つくる杜うまやとて
鞍も三歳弱は秋の味て
名はきぬく降参るる
入込は諏訪の海防のたる香
中かませひの 高井山伏

水 硯 翁 水 硯 翁 水 硯 翁
水 硯 翁 水 硯 翁 水 硯 翁

伊勢地名

一身田同国高田派本山

万葉ニ載トモリ目ヤシ
堀川百首ニウツをいもゆら
のあしおりのまよま

いさるを唯一方に
細き糸より糸つり
物おふふは酒徳を
月又る露の袖おとせ
秋風のねまこいさる波の
層りかや白まら松
子部讀むの壺りの一
吹禮死ぬる月のかけら
何よも蝶の現を表す
又ちわりのかさ一まよ
羅よりいさるはかた

水 硯 翁 水 硯 翁 水 硯 翁 水 硯 翁

花山院之面影ニテ元享親書ニ
見エタリ
万葉ニ朝武尊紀開守の手
束弓トテ起開ハ紀州梨
ノ鏡ナリ

古ハ却ナリ
隱逸傳増ノ翁ナリ面カケ
ニヤ

然那々々まきと泣かひたり
子来弓紀の舞さり 頑ツルギ不
酒ツルギこけりこもるまきと
双方の目を歌くまきと
飯の粘拂いむらふまき
中ツルギくまきと不居於磐石
赤名と里のまきと
情れをいぬ涙の汗を刺
月夜くまきと 明渡る月
むらり中ツルギまきと梅けくら梅
唯四方なるまきと 頑ツルギ

水 頑 水 頑 水 頑 水 頑

花ノ字三句ナリ
句引ハ冬ノ日春ノ日荒野ニ集
六ナリ 歌集以下原本ニ在リ
三ナリ
翁十二 瑠璃十二 曲水十一
古本名もまきとら 目を見
一ハ有テナリ二十五條ニ依テ
の意味をいふハ人ノ一様を
あはれ 相影の眼ハ
面

一葉の梅もつやを返り
醫者の茶を飲ぬを別
む喉も芳吐けをさし
杜ツルギふまきとまきの山中
いろくのまきとむらやまきと
うもれて梅のまきと
梅福のまきとつらまきと
雪のまきとぬ峰裁ツルギ
宗薩のまきとまきと
歌まきとむら月まきのまきと

水 頑 水 頑 水 頑 水 頑

瑠璃

水

全 頑 全

元禄以来の事トイハレ冊子
中ハ何ト噴出ス一フシヨ
云リ

庄野 伊勢

和日トキ

秋のききも悲しき時なり
こころをたてしむらふ 侍
うつゝの雨をきくも
小あふふら一市のあつ
難釣のちひさくふら川
多佛すもむむむむむ
うら一葉もふら年の暮
庄野の里は犬とおとされ
旅の雅き人の廻つた
むらういよ自にむら
汐のさす縁の下すむら

全 全 全 全 全 全 全 全 全 全

蕃麦温飽附一奇

李

櫻殿三エリ

生 朝 雨 浦 の 暮 け ぬ
は 村 の 廣 々 々 々 々 々 々 々 々
そ ぞ ぞ ぞ ぞ ぞ ぞ ぞ ぞ ぞ
か け け け け け け け け け
す け け け け け け け け け
あ の の け け け け け け け け
あ 麦 麦 麦 麦 麦 麦 麦 麦
う ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ ぐ
も も も も も も も も も
あ け け け け け け け け
文 珠 の 智 恵 も 祭 持 ち 祭 持

全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全

枕草紙ニあせりてすすま
かゝるゝきぬりくしき
引くちをとり

赤穂九崩一 路通八
荷兮十 越介

なれか減又とハ出まドハ日暮
何ともせぬよ 庭々 釣 柳
志のふれおのをりうぢくは笑ぢぢ
をよし 氣をたぬおれし
汗のふれおかえて心をとる
あまうりふるをうぢくはけて
むさかり又る人の強まふ
春ハ船ともおもはるる 松

人 字 今 人 今 今 今

城下

鉄炮の音をきよふもの 卯月外

野徑

山家集ニ沙をあるゆまの
小貝ひりしやうく各の深
いふよぬ 又後
集梅のあまきくまき
布の小貝外判口

原本おとてて見エトモ
おとてて書損分興本又お
もててて二作ル 麗ニヤ

砂の小麦の齧てまらり
西風よまきまわ小貝拾をせ
をまぬる一ハ 柳いり
甚きさうい二人ふける
秋の菘書り知中の 柳
おれを心細きおををれ
目の中におおくをから
りあま又川原をよく
都のをかき生れつき
まみり種まをうらや
一里こぞり山の 下川

里 東 泥 土 乙 柳 怒 石 等 野 徑 東 土 海 澄

野徑六里東六泥五六
乙州六怒誰六瑛碩五
筆一

根本律ニ我鳥一籠ノ古事ニ
ヨルト又老龜烹不爛移禍於
古葉云云乙州カ事跡ヨリ考
乙州
雜ノ卷ハ才三ニテ當季ヲ
定ム

杉村の谷にふる葉ふる葉つぎ
田の片隅に苗のころも

雜

兔の甲意らるる時にもせん
唯牛糞を風りふくき
る煙の末細はまゝの草を
小唄をうたふかゝるうら
狗をうたふひらき籠の力
猫のうたふまゆるりけ
秋萩の山前うたふ坊主流
風呂の加減のまづり

乙州

土 注
二 備
乙 州
孫 次
里 末
孫 志
昌 房
正 秀
及 肩
野 徑

梭魚子ノ色白シ

諺語

雁鳥 餌 雀 鳴 ち ち ち ち ち ち
云云
古 古 古 古 古 古 古 古 古 古
古 古 古 古 古 古 古 古 古 古
冬

春

秋

雪のやうきをうたふて鳴出
さのやうきをかきまゝの産
初は離れを捨てまら
んのでん 恵をうたふ
山屋の鳥はうたふて
おごころ 起てまゝに
鈴入の中若下てあり
ちくよふも又ゆるや
蓋をうたふ鳥のうたふ
春をうたふ鳥のうたふ

二 備
乙 州
孫 次
里 末
孫 志
昌 房
正 秀
及 肩
野 徑

利休子氏仕豊臣家領三年
石天正十八年没
ゆり字三句つり

古今集ニ秋風よほまぢぬ
ら一後禱つたせよき
くくれ

源氏淡墨をく面敷き

自新より利休のあを鼻よりかけ
度く草をむらむらむら
虫と踏つれくもやん
りきくの本殿もつめ
折る文をむらむらむら
なみくぐり侍
源磨ハ中々物少自由なる
秋の怒る弓かりや
月詠る所是く重の銀河
望理み店くむらむら
いぬそく大福もむらむら

全 破 秀 破 秀 破 秀 破 秀 破 秀 破 全

石の山頂ニ法印の尊なる後
の禱つたせよきくくも
くくく

禪門の男子剃髪後

藤三撥名客より
越さく東鑑時宜

獨りあるも禱つたせよき
江戸風を吹度く
河の山の禱つたせよき
さき在りて既禱つたせよき
火を吹て禱つたせよき
本堂にすく荒壁の禱つたせよき
羅陵の袂に禱つたせよき
歯を痛む人の禱つたせよき
藤三の言に禱つたせよき
口之果ぬいさるの時宜

全 破 秀 破 秀 破 秀 破 全

今熊本三作
管偽字

原吃書損

八ノ色濃ク云リ
七部集中公洞ノ書見ハ此集
ニ其角ハ集ニ始テ第ト書
棟葉撰ノ時第ト我ヲ第ト書
尤可憐必書コトカレトノ玉ハリ
滅後尊称ニテ公洞ト書入ハ苦
ニカニ九ニ

昔々小判かきふる華袴
秋入初胆後の隈本
幾日後も書て自をる後名船
素布子下着さこりり
次山ノ元めくこと叱らねて
鳴きあけとも猫とゆらん
子親山中人町の馬あうり
や一回の櫛本の芽萌え
かぬかよき踏引きききあうり
小形あたる結もゆる陽矣

秀 破 秀 破 秀 破 秀 破 秀 破

